

## 旧満州における歴史的建造物の現物保存および利活用に関する研究

Research on preservation and utilization of historic buildings in Old Manchuria

内藤 旭恵  
Akie NAITO

(平成29年10月3日受理)

旧満州は、現在の中国東北地方を指す。旧満州は、1932年（昭和7年、大同元年）から1945年（昭和20年、康德12年）まで日本が統治していた時代に満州国が置かれていた地域である。長く暗い戦争の時代とは裏腹に、「五族協和」や「王道楽土」をスローガンに、東洋に国際都市を築こうとしていた痕跡が現在でも残っている。日本が思い描いていた夢は潰えたが、その夢は現在の中国に引き継がれ、大切に守り継がれている。こうした激動の時代を乗り越えてきた建造物が現在も残されており、その一部が歴史的建造物として当時の様子を今に伝えている。

本研究では、日本が旧満州に建設した建造物を取り上げ、現物保存と利活用の現状について示し、今後日本における歴史的建造物の利活用の方法について検討を行う。本論文では、満州国に関する是非に関しては触れず、あくまでも歴史的建造物の保存や利活用の観点からのアプローチとし、資料論文として執筆を行うものである。

### 1. はじめに

明治の開国とともに、西洋の文化が日本にも流入し、国策の一環で、世界に冠たる一等国を目指すといった考え方の下、世界に追い付け追い越せと国を挙げて大国に挑んでいった時代に、建築業界では、煉瓦建築や石造建築、そして鉄筋コンクリート造建築の技術が日本にもたらされた。日本国内では、東京駅丸の内口周辺に三菱財閥が一兆倫敦や一兆紐育と呼ばれる近代オフィス街を構築し、世界の大都市の複製を日本国内に建設しようとしていた。さらに、東京駅八重洲口周辺から日本橋にかけては、三井財閥が一大金融街や商業街を構築し、文化や情報の発信基地を設置していた。こうした状況の中、世界各国では、帝国主義の名の下に、植民地を増やし、領土を拡大するといった方向に邁進していた。我が国においても、世界の波に吞まれる形で、アメリカやイギリスを参考にして、アジア政策に乗り出していたのである。当時日本は、統治していた国々において、単に占領するのではなく、近代化を推し進め、さらに雇用を増やすとともに、豊かな暮らしを提供するといった戦略を採用していた。従って、日本国内以上に最先端の技術や近代的な手法を取り入れて国の構築や都市開発を行っていった。

一方で、日本国内に目を向けると、同時代に実施された当時の都市開発の遺構や建造物は、関東大震災、東京大空襲、高度経済成長、オリンピック特需、万博特需を経て、そのほとんどが解体され、さらに2001年頃からスタートした再開発事業によって、僅かに残さ

れていた歴史的建造物も解体となり、近年現存する歴史的建造物の棟数は指折り数える程度となった。

一方、中国大陸に目を向けると、終戦時に放棄された建造物は、現在に至っても再利用され、その多くが現存しているのである。完全体として残されているものは公共機関が入居しており、一部や全部が改装されているが骨格や面影が残されているものは、一般企業や個店などが利用しているケースと個人宅として利活用しているケースがあった。そこで本研究では、中国大陸に残されている歴史的建造物のうち、旧満州地域である新京（長春）、奉天（瀋陽）、大連に焦点を当て、日本が建造した歴史的建造物の利活用の現状について述べる。

## 2. 先行事例

中国大陸の事例を示す前に、先行事例として、同時代に日本国内に建設された歴史的建造物のうち、現在も利活用されているものについて述べる。

日本国内における歴史的建造物の利活用の例は、三菱一号館、東京駅丸の内駅舎、東京中央郵便局、日本工業倶楽部会館、三井本館などが代表的である。三菱一号館は、同一街区に同一の工法で新築再現された。東京駅丸の内駅舎は、終戦後に仮修復されていた部分を排除し、竣工当時の状態に復原された。東京中央郵便局は、外周の外壁のみを残し、内部は新築の高層ビルとして建て替えられた。日本工業倶楽部会館は、一部温存し、一部新築再現し、一部は高層ビル化するといった新たな手法で保存再現が実施された。三井本館は、都心部で唯一と呼べるほど竣工当時の状態で現在まで保存され、さらに大々的に利活用されている珍しい建造物であるが、エレベータの設置等によるバリアフリー化が施された近代改装が行われている。

このように、日本国内においても、歴史的建造物の保存や利活用は積極的になされているものの、完全体でかつ動態保存が成されている事例は非常に少ないのである。そこで、次に、旧満州地域における歴史的建造物の利活用の状況を確認する。

## 3. 旧満州における歴史的建造物の利活用

旧満州における歴史的建造物の利活用について、3. 1 新京、3. 2 奉天、3. 3 大連の順で述べる。また、新京・奉天・大連の当時の街の様子は、「日本人が残した素晴らしき満州」、「図説満洲都市物語」、「図説大連都市物語」、「図説満州帝国の戦跡」、「大日本・満州帝国の遺産」を参照のこと。

### 3. 1 新京の事例

新京は、旧満州国の国都であり、愛新覚羅溥儀が居を構えた都市である。大連より北に700kmのところを位置し、ハルピンや奉天を結ぶ交通の要衝となっていた。国都であるため、皇宮のほか、国の中央諸官庁などもあり、日本の帝都東京と類似した都市計画となっている。皇宮は、現在、博物館になり、国の中央諸官庁は、吉林大学の校舎や政府の施設、軍の施設、病院などとして利活用されていた。

新京の市街地を調査していると、和漢折衷の街並みとなっており、日本における昭和期の原風景と通じるものがあり、あたかもタイムスリップしてしまったような感覚に陥るほど当時の様子を今に伝えていた。特に、中央諸官庁街は、近代都市を構築していた頃の丸の内や霞ヶ関、永田町周辺を連想させる街並みとなっており、興味深い建築保存である。

以下に、その様子を示す。

図1から図8は愛新覚羅溥儀が執政から皇帝時代に至るまで過ごした宮殿である。本来であれば、帝宮が中央官庁街に竣工予定であったが、建設中に終戦を迎えたため、移転することはなかった。皇宮には、実際に溥儀が座った玉座なども残されていた。



図1. 満州国皇宮（偽満皇宮博物院）



図2. 勤民楼



図3. 愛新覚羅溥儀玉座



図4. 日満議定書



図5. 愛新覚羅溥儀執務室



図6. 愛新覚羅溥儀専用デスク



図7. 同徳殿



図8. 同徳殿内部のホール

図9から図13までは、新京ヤマトホテルである。近代改装が施されており、外観以外は原型を留めていないが、外観は、竣工当時の状態に復原され、外壁の色なども元通りに修復されていた。図14は、南満州鉄道新京支社である。現在も公共機関が入居しているため、概ね当時の状態で保存されていた。一部、窓枠等が、スチール製からステンレス製やアルミ製に変更されていた。



図9. 新京ヤマトホテル (春誼賓館)



図10. ステンドグラス (当初部材)



図11. 新京ヤマトホテル旧正門跡



図12. 新京ヤマトホテル通用門





図13. 愛新覚羅溥儀専用鏡



図14. 南満州鉄道新京支社（長春鉄路分局）

図15と図16は関東軍司令部である。現在も共産党などが政府庁舎として使用している。調査当日は、中朝問題により、厳戒態勢が敷かれていたため、夜間撮影となったが、外観上は、当時の原型を留めていた。唯一変更されている部分は、冷暖房設備の煙突が撤去されていた程度である。



図15. 関東軍司令部（中国共産党吉林省委員会）



図16. 関東軍司令部

図17は、関東局である。図18は、満州中央銀行である。いずれも内部への立ち入りは制限されていた。



図17. 関東局（吉林省人民政府）



図18. 満州中央銀行（中国人民銀行吉林省支店）

図19は満州電話電信株式会社である。図20は満州首都警察庁である。いずれも写真撮影は可能であったが、ゲートに軍人がおり、一步の立ち入りも許されない状況であった。

ここからは、満州国時代の中央政府が使用していた中央官庁街である。いずれの建造物も近代改装や補修工事中であり、遠距離撮影となったが、当時の様子を正確に残していた。また、銘板を見てわかる通り、偽満州国とはなっているものの、各建造物は文化財登録がなされていた。



図19. 満州電話電信株式会社（長春市電信局）



図20. 満州首都警察庁（長春市公安局）



図21. 満州国国務院（吉林大学医学部研究棟）



図22. 満州国国務院銘板



図23. 満州国軍事部（吉林大学医学部附属病院）



図24. 満州国軍事部中央エントランス



図25. 満州国軍事部中央エントランス



図26. 満州国軍事部中央階段



図27. 満州国軍事部銘板



図28. 満州国軍事部銘板



図29. 満州国軍事部外壁



図30. 満州国軍事部レリーフ



图31. 滿州国軍事部背面増築部



图32. 滿州国司法部（吉林大学医学部研究棟）



图33. 滿州国司法部門柱



图34. 滿州国司法部改修工事



图35. 滿州国司法部改修工事概要



图36. 滿州国司法部改修工事概要





図37. 満州国総合法衙（中国人民解放軍第四六一病院）



図38. 満州国総合法衙中央エントランス



図39. 満州国総合法衙中央エントランス



図40. 満州国総合法衙中央エントランス



図41. 満州国総合法衙シャンデリア



図42. 満州国総合法衙内観



图43. 满州国交通部（吉林大学新民校区）



图44. 满州国交通部レリーフ



图45. 满州国經濟部（吉林大学第三附属病院）



图46. 满州国經濟部内観



图47. 大同大街（人民大街）



图48. 大同大街（人民大街）



図49. 三菱康徳会館（長春市人民政府）



図50. 三菱康徳会館



図51. 三中井百貨店（長春百貨大樓）



図52. 三中井百貨店



図53. 豊楽劇場（吉林大薬房）



図54. 豊楽劇場外観



図55. 満州国帝宮方面



図56. 新京駅方面



図57. 大興ビル（吉林省政府庁舎）



図58. 新京駅前複合ビル



図59. 新京駅前複合ビル



図60. 新京銀座吉野町（長江路）





図61. 新京銀座吉野町



図62. 新京銀座吉野町



図63. 横浜正金銀行新京支店(市雑技団)



図64. 横浜正金銀行新京支店



図65. 日本橋通り(勝利大街)



図66. 日本橋通り(勝利大街)



图67. 日本人街



图68. 日本人街



图69. 满州電信電話局(チャイナ・ユニコム)



图70. 满州電信電話局改修部



图71. 满州中央銀行南広場支店(浴溪隆洗浴広場)



图72. 日本人街駄菓子屋(民家)



図73. 日本人街木製電柱



図74. 新京駅（長春駅）



図75. 新京駅周辺



図76. 新京郵便局（長春中央郵便局）

### 3. 2 奉天の事例

奉天は、新京や大連に次いで満州国の第三の都市であり、交通の要衝となっていた。撫順炭坑や鞍山製鋼所が近郊にあったため、工業の街として栄え、常に労働者で溢れていた。現在は、瀋陽故宮博物院などが立地するため、観光都市としての趣の方が強い。



図77. 南満州鉄道奉天支店



図78. 南満州鉄道奉天支店銘板

奉天の強みは、駅前一帯が当時の状態のままほぼ完全体として保存されていることである。奉天駅は、瀋陽駅と改称しているが、概ね改装されることなく、満鉄時代の様式が維持されていた。さらに、驚くべきことは、駅前大通りに隣接する駅前ビル群が、ほぼ完全体として、当時のまま残されているのである。一部窓が扉に改装されていたり、壁が窓になっていたりと手を加えてはあがあるが、ファサード的には、さほど変化はなかった。また、マクドナルドが入居しているなど、中国らしい利活用方法も確認することができた。



図79. 奉天駅（瀋陽駅）



図80. 奉天駅



図81. 奉天駅



図82. 奉天駅





図83. 奉天駅前



図84. 奉天駅前



図85. 奉天駅前



図86. 浪速通り（中山路）



図87. 浪速通り



図88. 浪速通り



图89. 七福屋百貨店（ホテル・薬局）



图90. 七福屋百貨店



图91. 七福屋百貨店銘板



图92. 七福屋百貨店銘板



图93. 七福屋百貨店（ホテル）



图94. 大東亜出版社（都市快車）



図95. 奉天郵便局（大原街郵便局）



図96. 奉天郵便局内観



図97. 南満州鉄道社員寮（集合住宅）



図98. 南満州鉄道社員寮



図99. 武田薬品奉天支店（複合ビル）



図100. 春日町商店街



图101. 奉天自動電話交換局(チャイナ・ユニコム)



图102. 春日通り(太原街)



图103. 佐藤齒科(個人商店)



图104. 歴史的建造物案内板



图105. 藤田洋行(秋林百貨店)



图106. 秋林百貨店銘板





図107. 横浜正金銀行奉天支店(中国工商銀行)



図108. 奉天警察署 (瀋陽市公安局)



図109. 奉天三井ビル (招商銀行)



図110. 朝鮮銀行奉天支店 (華夏銀行)



図111. 満州医科大学病院 (中国医大一院)



図112. 満州医科大学病院



図113. 東洋拓殖株式会社（瀋陽市商工会）



図114. 奉天ヤマトホテル（遼寧賓館）



図115. 奉天ヤマトホテル銘板



図116. 奉天ヤマトホテル銘板



図117. 奉天ヤマトホテルメインエントランス



図118. 奉天ヤマトホテルメインエントランス



図119. 奉天ヤマトホテルレリーフ



図120. 奉天ヤマトホテルテラコッタ煉瓦



図121. 奉天ヤマトホテル旧デスク



図122. 奉天ヤマトホテル階段ホール



図123. 奉天ヤマトホテル客室貴賓宿泊者銘板



図124. 奉天ヤマトホテル客室廊下



図125. 奉天ヤマトホテルバンケットホール



図126. 奉天ヤマトホテルステージ



図127. 奉天ヤマトホテルスポットライト



図128. 奉天ヤマトホテルステージ



図129. 奉天ヤマトホテルホール



図130. 奉天ヤマトホテルホール





図131. 奉天ヤマトホテル展示



図132. 奉天ヤマトホテル内観



図133. 奉天ヤマトホテル車寄せ



図134. 浪速通り



図135. 春日通り



図136. 春日通り



図137. 満州中央銀行（亨吉利世界名表中心）



図138. 満州中央銀行



図139. シャッター改修部



図140. 中山路欧風街



図141. 張学良邸



図142. 張学良邸虎の間

### 3. 3 大連の事例

大連は、満州国当時、日本や海外と満州を結ぶ玄関口であった。大連港から九州や北陸地方への定期便が毎日運航されていたのである。現在は、航空機にかわったため、港は貨物船の入港が中心である。大連は、ここ数年で、政府の援助が入り、近代都市へと変貌を遂げたため、日本統治時代の建造物は減少傾向にあるが、日本が満州で最初に都市開発を行ったこともあり、満州の中で最も豪華絢爛な建造物が数多く残されている。



図143. 大連ヤマトホテル（大連賓館）



図144. 大連ヤマトホテル銘板



図145. 大連ヤマトホテルメインエントランス



図146. 大連ヤマトホテルバンケットホール



図147. 大連ヤマトホテル採光窓



図148. 大連ヤマトホテル絵葉書





図149. 東清鉄道本社（大連芸術展示館）



図150. ターリニー市政府（廃墟）



図151. 東清鉄道社員寮（カフェ露西亜1896）



図152. ロシア人街（鉄道1896花園酒店）



図153. 大広場（中山広場）



図154. 英国領事館（金融大廈）





図155. 大連市役所（中国工商銀行）



図156. 横浜正金銀行大連支店（中国銀行）



図157. 南満州鉄道本社（大連鉄路局）



図158. 南満州鉄道本社総裁室



図159. 南満州鉄道病院（大連大学病院）



図160. 旅順関東軍司令部（博物館）



图161. 物産陳列所（旅順博物館）



图162. 愛新覺羅溥儀邸（民家）

#### 4. 考察とまとめ

旧満州地域の歴史的建造物の利活用の現状を調査して明らかになったことは、中国が歴史的建造物の文化財的価値を評価して積極的に保存を推進しているわけではなく、日本が建設した建造物を解体し新築する費用をかける無駄を省くといった観点から使い続けていたことである。旧満州地域の住民にヒアリング調査を実施した結果、満州国の存在や日本が統治していたという過去に関しては、その後の内戦などの影響もあり、さほど悪い印象を持っている人は少なく、むしろ、日本が建設した建造物はモダンでかつ頑丈であるため、ありがたいものを残してくれたと話すが多かった。他の国の様に日本が建設した建造物は嫌な感情を想起させるため解体するといった状況には至っていなかった。

一方で、歴史的建造物の保存や利活用に関しては、その手法は多種多様であり、大連ヤマトホテルや奉天駅などのように現状のまま動態保存をしている例もあれば、新京ヤマトホテルや奉天ヤマトホテルのように外観と躯体を保存し内観や内装を近代改装するといった例もあった。さらに、新京銀座吉野町のように、一帯を解体した上で、当時の外観だけ保存継承しようと、ファサード保存した例もあり、地域ごとにその方法は多種多様であった。

歴史的建造物の保存において、日本国内では、都市の中心部に完全体として動態保存している例は非常に少ないため、中国の旧満州地域は非常に珍しい事例であった。技術と文化の両面からみても貴重であるといえよう。技術面では、当時の技術や建築スタイルなどを現代に伝えることができ、文化面では、当時の生活様式や景観などを残すとともに、当時の人々の息吹や生き様を感じ取る上で貴重な資料であり重要な財産となっている。日本に現存する歴史的建造物を保存するにあたっては、旧満州地域の歴史的建造物の保存や利活用の方法を取り入れて実施することで、より精度の高い保存が可能となると考える。

【参考文献】

- [1]加藤聖文、「満鉄全史 「国策会社」の全貌」、講談社、2006
- [2]川村湊、「満洲鉄道まぼろし旅行」、ネスコ、1998
- [3]喜多由浩、「満洲文化物語 ユートピアを目指した日本人」、集広舎、2017
- [4]小林慶二、福井理文、「観光コースでない満州—瀋陽・ハルビン・大連・旅順」、高文研、2005
- [5]小林英夫、「満鉄—「知の集団」の誕生と死」、吉川弘文館、1996
- [6]小林英夫、「日中戦争 殲滅戦から消耗戦へ」、講談社、2007
- [7]小林英夫、「〈満洲〉の歴史」、講談社、2008
- [8]小林英夫、「満鉄調査部」、講談社、2015
- [9]島田俊彦、「関東軍」、講談社、2005
- [10]太平洋戦争研究会、「図説 満州帝国」、河出書房新社、2010
- [11]宝島社、「日本人が残した素晴らしき満州 ～統治時代の貴重な写真を発掘」、宝島社、2015
- [12]田中禎彦、日本植民地における歴史的建造物の調査保存事業・中国東北部（満州国）・朝鮮を中心として（博士論文）、京都大学、2009
- [13]地球の歩き方編集室、「D04 地球の歩き方 大連 瀋陽 ハルビン 2015」、ダイヤモンド社、2014
- [14]塚瀬進、「満洲の日本人」、吉川弘文館、2004
- [15]辻田真佐憲、「満洲帝国ビジュアル大全」、洋泉社、2017
- [16]西澤泰彦、「図説 「満洲」都市物語—ハルビン・大連・瀋陽・長春」、河出書房新社、1996
- [17]西澤泰彦、「図説 大連都市物語」、河出書房新社、1999
- [18]西澤泰彦、「図説「満洲」都市物語〔増補改訂版〕」、河出書房新社、2006
- [19]ハインリッヒ・シュネー、金森誠也、「「満州国」見聞記 リットン調査団同行記」、講談社、2002
- [20]波多野勝、「昭和天皇とラストエンペラー—溥儀と満州国の真実」、草思社、2007
- [21]平塚紘緒、太平洋戦争研究会、「図説 写真で見る満州全史」、河出書房新社、2010
- [22]前間孝則、「満洲航空の全貌：1932～1945大陸を翔けた双貌の翼」、草思社、2013
- [23]水島吉隆、太平洋戦争研究会、「図説 満州帝国の戦跡」、河出書房新社、2008
- [24]宮脇淳子、岡田英弘、「真実の満洲史【1894-1956】」、ビジネス社、2013
- [25]山川暁、「日本の戦歴 満州帝国の誕生—皇帝溥儀と関東軍」、学習研究社、2001